

しんじつのしようめい

小原 裕人

新学期が始まってから一週間が経ちました。身

体測定や自己紹介。委員会、係決め。新入生歓迎会などがとんとん拍子に終わり、ようやく落ち着き始めた頃です。

三階にあるこの教室から見える景色も、淡紅色から鮮やかな緑色に移り変わろうとしています。窓枠を額縁に見立てた自然の絵画を眺めていた私は、溜め息をつきました。

「おはよう、なつき。今日の溜め息は一段と深いねえ」

両手で頬杖をついた私の眼前で手を振っているのは、ともこちゃんでした。

「おはよう」

消え入りそうな声で辛うじて挨拶をした私は、力なく机に体を預けました。

「うわ、なつき重症。でも、そうだよね。まゆが学校休んでから一週間だもんね……」

明るく振る舞っていたともこちゃんも伏し目がちになってしまいました。

汚染されたんだよ」

「私、うつたりしてないかな」

教室のどこからか聞こえたその言葉に、私は息が詰まりそうになりました。

やめてよ。汚染？ そんなわけないよ！

先生が気を取り直して出席確認を再開したことにも気付かず、ただ自問自答の渦に飲まれていました。

「根元いおり」

「はい」

違う。まゆちゃんは、そんな……。

「牧川なつき」

だって、あの事故は大丈夫だつて――

「おい、牧川なつき」

「は、はい！」

名前を呼ばれていたことに気付き、私は慌てて返事をしました。

先生は怪訝な顔をしていましたが、何も言わずホームルームを終わらせました。

私は火照った顔を手で覆い、深く息を吐きました。そして、空っぽになつているまゆちゃんの席に目を向け、あの事故さえなければ、と心の底からそう思いました。

それは、ちょうど八日前のこと。町の外れにあ

真っ白な空間に私たち一人だけ張り付けられたように、無音の時間がゆっくりと流れています。それはとても息苦しいものでした。

そんな息苦しさを、ホームルームの始まりを告げた頃です。

「元気出しなよ、なんて酷だけど、あたしたちが落ち込んでいたらさ、まゆもきっと悲しむよ」

振り絞るようにそう言つたともこちゃんは、ぎこちなく笑つてみせると、そのまま自分の席に戻つて行きました。彼女の後ろ姿を見つめ、ちょっと強がつているね、と私は呟きました。でも、とが苦手で、少し寂しがり屋で。私の大切な友達です。

それでも一人、私には大切な友達がいます。

ともこちゃんは、この中学校で知り合つた初めての友達。いつも明るく、行動力があつて、数学が苦手で、少し寂しがり屋で。私の大切な友達です。

くちや。

この中学校は三年生になるまでクラス替えはなく、担任の先生も基本的にそのまま持ち上がりで終えると出席を取り始めました。

「会沢ともこ」

「はい」

「田波まゆ。――体調不良か」

友達の名前が呼ばれ、私は反射的に顔を上げました。教室内もわずかにざわめきが起つていました。そのざわめきの中から微かに嫌な会話が聞こえました。

「田波まゆ、東の森にいたんですよ。やつぱり、

優しくて、照れ屋で、歌を歌うのが上手で、意思が強くて。

扉がガラガラと音を立て、担任の谷田先生が入つてきました。

「よし、ホームルームを始めるぞ」

ジャージが似合う男勝りな先生は、朝の挨拶を終えると出席を取り始めました。

「会沢ともこ」

「はい」

この中学校は三年生になるまでクラス替えはなく、担任の先生も基本的にそのまま持ち上がりで終えると出席を取り始めました。

「田波まゆ。――体調不良か」

友達の名前が呼ばれ、私は反射的に顔を上げました。教室内もわずかにざわめきが起つっていました。そのざわめきの中から微かに嫌な会話が聞こえました。

「田波まゆ、東の森にいたんですよ。やつぱり、

幸いにも死傷者は出ず、薬品が工場の外に漏れる心配もない、とのことでした。話はそれで終わるはずでした。ところが爆発事故の翌朝、妙な噂が流れていました。

薬品が工場から漏れて、東の森が汚染された、と。

東の森は薬品工場の近くにある森のことで、私は眞に受けことはしませんでした。クラスの人たちも初めは驚きや不安を口にしていましたが、ここからは結構離れているということもあり、深く気に留める人はいませんでした。この瞬間までは。

「それってやっぱり、人に感染するのかな」「やめてよ、そんなわけ……ないって言い切れるのかな」

皆の声が針のよう耳を通り抜け、私の意識は朦朧としていました。ただ、どす黒いものが胸の奥でうごめいているだけは、確かに感じていました。

張り詰めた教室の空気に亀裂が生じたのは、扉が開かれたときでした。

「おはよう」

まゆちゃんでした。優しい微笑みを浮かべた彼女がそこにいました。

感熱紙を力任せに破いたような衝撃が教室中を駆け巡りました。安全であるはずの領域が、突然発生した不安要素によって侵されると、人は本能的に自分を守ろうと躍起になります。まゆちゃんはそんな私たちの異変に気付き、首を傾げました。

「わ、わたしは遠くから見かけただけで。でも森が汚染されたっていう噂がもし本当なら、まゆも……汚染されちゃっているかもしない」

根元さんの言葉に、教室にいた全員が凍りつき

ました。しばらくした後、ゆっくりと氷が溶ける

「ねえ、何があったの？」

「ちよつと、お手洗いに」

何人かが連れ立つて教室を飛び出しました。

しんじつのしょめい

まゆちゃんの手が触れようとした瞬間、根元さんは短く悲鳴を上げて後ろに飛び退きました。

それを見たまゆちゃんは慌てて手を引っ込めました。

細い腕に力を入れ、深呼吸した根元さんは静かに言いました。

「まゆ、昨日の薬品工場の事故は知っているよね？」

まゆちゃんはこくりと頷きました。

「その事故が起った後、東の森に入つたよね？」

まゆちゃんは根元さんが言おうとしていることを理解したのか、険しい声で返しました。

「入つたよ。でもそんなことで——」

「まゆ、ごめん」

言葉を遮った根元さんは、最悪の可能性を信じてはつきりと告げました。

「あんた、汚染されているかもしない。だから、わたしたちが安心できるようになるまで学校には来ないで」

それはあまりに冷たい言葉でした。まゆちゃんはたじろぎました。そして、私と目が合つた瞬間、唇を噛み締めて教室を飛び出しました。

このとき私は気付くことができませんでした。大切な友達に向けていた視線に、恐怖と憎悪

が入り混じっていたことに……。

今日の授業のことは何一つ、私の頭に入りました。

あの日から一週間が過ぎた今、私はどうすれば良いのか。ひたすらそのことだけを考えていたのです。一日中俯いていたので、ともこちゃんが気遣つてくれました。

「まゆは元気だよ。もうすぐ会える、きっと笑顔で会えるよ」

そのおかげで一つの答えに辿り着きました。

まゆちゃんの家に行こう。

盲点でした。現状を知るには本人に会うしかありません。元気だというなら会いに行つても大丈夫だということです。でも、ともこちゃんは何故まゆちゃんが元気だと断言したのでしょうか。それを訊ねようしましたが、ともこちゃんはすでに委員会の集まりに行つてしまつた後でした。

まゆちゃんの家に行こう。

夫だということです。でも、ともこちゃんは何故まゆちゃんが元気だと断言したのでしょうか。それを訊ねようしましたが、ともこちゃんはすでに委員会の集まりに行つてしまつた後でした。

まゆちゃんの家に行こう。

夫だということです。でも、ともこちゃんはすでに委員会の集まりに行つてしまつた後でした。

ちで応接室に入りました。

「あの、お話をいうのは何でしようか」

先生は来客用のソファに私を座らせ、その向かい側に座りました。

「お前、田波の家に行こうとしていないか？」

その問い合わせは意外であるとともに、図星でした。

「今朝の様子と、放課後の様子を注意深く見比べたらきっとそうだと思った。それに、お前で二人目だからな」

「二人目？」

「今日の昼休み、会沢が田波に会いたいって私に会えるよ」

そのおかげで一つの答えに辿り着きました。

まゆちゃんの家に行こう。

盲点でした。現状を知るには本人に会うしかありません。元気だというなら会いに行つても大丈夫だということです。でも、ともこちゃんは何故まゆちゃんが元気だと断言したのでしょうか。それを訊ねようしましたが、ともこちゃんはすでに委員会の集まりに行つてしまつた後でした。

まゆちゃんの家に行こう。

夫だということです。でも、ともこちゃんはすでに委員会の集まりに行つてしまつた後でした。

しんじつのしょうめい

へ入ろうとした私ですが、足が動いてくれません。学校を出たときはあんなに気持ちに余裕があつたのに。

——薬品。汚染。有害。

断片的な単語がどうしても思考に貼り付いてしまって取れません。私の心は、見えない敵による恐怖ですっかり埋め尽くされました。自分

の心の弱さに唇を噛み締めます。結局その日は森に入ることができず、まゆちゃんに会うことはありませんでした。

恐怖ですっかり埋め尽くされてしまいました。自分

の心の弱さに唇を噛み締めます。まゆちゃんに会うことはありませんでした。

恐怖ですっかり埋め尽くされてしまいました。自分

の心の弱さに唇を噛み締めます。まゆちゃんに会うことはありませんでした。

翌日の授業後、先生が書類の束を抱えて教室に入るなり、教卓に叩きつけるように置きました。全員驚いて先生に注目しました。

「これが何か分かるか」

態度とは裏腹に、先生は静かな口調で話しました。

「この紙には、例の薬品工場周辺一キロ圏内の汚染濃度が書かれている。私が何人かの専門家にお願いして、この一週間の間に何度も調査してもらったものだ」

先生は書類を掲げて言いました。

「圏内全域において汚染の確率はゼロだ」

その一言に私を含む全員が目を丸くしました。

に俯いている根元さんの姿がありました。

「いおり」

「まゆ。わたし、わたしのせいで——ごめんなさい」

根元さんは深々と頭を下げて謝りました。まゆちゃんは笑顔で応えました。

「いおりのせいじゃないよ。悪い夢に苦しめられて辛かったでしよう？」

その言葉だけで十分でした。根元さんも泣きながらまゆちゃんに抱き付こうとしています。そんな私たちを見ていたともこちやんは溜め息をつきました。

「二人とも泣いてばかり。せつかくの仲直りが台無じじゃない」

「そう言いつつ、お前も泣いているじゃないか。ほら、行って来い」

いつの間にかともこちやんの横に立っていた先生が背中を押した途端に、ともこちやんも涙を流しながら私たちのところへ駆け寄りました。

「先生のおかげです。ありがとうございます」

三人に抱き締められたまゆちゃんは先生に感謝して、満面の笑みを浮かべます。先生は照れ臭そうに笑っていました。

川の中でも抱き合った私たち四人。かけがえのないひとときでした。

「田波は、眞実が証明されるまで一週間耐えた。立派だよ、あいつは。東の森が汚染された？ そこにいた田波も汚染された？ 冗談じゃない。確かに根拠のない出鱈目を信じたりする方がよっぽど汚れている」

一呼吸おいて先生は続けました。

「田波は誰のことも恨んでいない。眞実を知つてどうするかはお前たち次第だ。だけど、これだけは言わせてもらう。人の価値観は様々だ。嫌いなら嫌いでいい。ただ、一方的に排除するのは絶対にやめる」

それは決して反論を許さない、圧倒的な言葉でした。すすぐ泣く子がいる中で、ともこちやんは立ち上がりました。それを見た私も反射的に立ち上がり、気が付けば教室を飛び出していました。ともこちやんの他にもう一人、教室を出たのが見えた気がしました。

私は通い慣れた通学路を、脇目も振らず走りました。途中で何度も躊躇しました。家の前を通り過ぎ、東の森を目指して休みなく走り続けました。森に辿り着く頃には疲労困憊でした。森は昨日と同じ佇まいで私にその存在感を示しています。しかし、今は何も怖くありません。私は堂々と森に足を踏み入れました。

久しぶりに入った森はひんやりとして心地良くて、汗が冷たく感じられるほどです。濃い緑の匂いが鼻腔をくすぐります。木々の間を縫うようにしてしばらく歩くと、やや開けた場所に小さい川が見えてきました。懐かしいせせらぎに耳を澄ましていたそのときでした。

「なつきちゃん」

その澄んだ声の主は川の水に素足を浸し、丸い石に座って本を読んでいました。

制服姿のまゆちゃんでした。

「まゆちゃん！」

私は慌てて靴も靴下も脱ぎ捨てると、川の中を歩いて行つて親友に飛び付きました。

「ごめんね。私、まゆちゃんに酷いことした」

私に抱き締められたまゆちゃんは照れ笑いを浮かべました。

「いいよ。きっとここに来ててくれる、そう信じていたから」

私が目に大粒の涙を浮かべていると、背後から荒い息遣いと声――。

「やつと追い付いた。こら、なつき！ 笑顔つて言つたでしょ、ちゃんと笑つて！」

振り向くと、私の脱ぎ散らかした靴や靴下の横でともこちやんがガツツポーズをしています。

そして、ともこちやんの隣には申し訳なさそう

東の森には色々なものが隠されます。上履きも、真実も、涙も、笑顔も。